

かごめかごめ

安齋育郎

このところアメリカのトランプ大統領関連のニュースを聞いているうちに、初代・林家木久蔵師匠（現・木久翁師匠）が落語『林家彦六伝』で紹介したわらべうた「かごめかごめ」を思い出しました。

「かごめかごめ」は子どもの遊び唄の一つで、私が諳んじている歌詞は次の通りです。

かごめかごめ／かごのなかのとりは／いついつでやる／よあけのぼんに／つるとかめが
すべった／うしろのしょうめんだ～れ

あらためて読んでみると、とても不思議な文句です。いったい何を意味するのでしょうか？

もっともこの唄にはたくさんのバリエーションがありますので、上の文句は一つの例に過ぎません。他にも、「かごめかごめ／籠の中の鳥は／いついつ出やる／夜明けの晩に／つるつる滑った／鍋の鍋の底抜け／底抜いてたもれ」とか、「籠目籠目／加護の中の鳥居は／いついつ出会う／夜明けの番人／つるっと亀が滑った／後ろの少年だあれ？」とか、「かごめかごめ／籠の中の鳥は／いつもかつもお鳴きやある／八日の晩に／鶴と亀が滑ったとさ／ひと山、ふた山、み山越えて／ヤイトをすえて やれ熱つ」などいろいろあります。

したがって解釈にも多様性があり、たとえば、この唄を「自由のない遊女（籠の中の鳥）の悲哀を表している」と解し、「一日中（夜明けの晩に）男性の相手をさせられ（鶴と亀が滑った）、いつここから抜け出せるのだろう（いついつ出やる）と嘆いているうちに、もう次の相手の顔が見え隠れしている（後ろの正面だあれ）」という解釈もあります。中には、「徳川御用金の在りかを暗示する唄だ」とか、「伊勢神宮の秘密を詠んだものだ」といった解釈もあります。

林家木久蔵師匠が紹介した解釈は、そうした解釈に比べればとても「もっともらしい」ものでした。

「かごめかごめ」というのは「囲め囲め」が訛ったものだといえます。

「かごのなかのとり」（籠の中の鳥）の「とり」はいわゆる空を飛ぶ鳥のことではなく、「得体の知れないもの」「何だか分からないもの」「不気味なもの」「不思議なもの」全体を表しているという解釈です。日本には昔から不気味な妖怪「ぬえ」が伝えられていますが、文字では「鶴、鵺、恠鳥、奴延鳥」などと書きます。いずれも「鳥」の字形が含まれていますが、意味は「妖怪、もののけ」です。

「いついつでやる」（いついつ出やる）は、文字通り、「せっかく籠の中に閉じ込めたのに、いつまた逃げ出してしまうのか」というものです。

その「いつ」を表すものが「よあけのぼん」（夜明けの晩）ですが、これは「逆さ言葉」で本当は「晩の夜明け」、つまり、「払暁」「明け方」「黎明」を意味すると解釈します。

そして、「つるとかめがすべった」（鶴と亀が滑った）というのは、「縁起のいいものが滑った」のだから、「何か不吉なことが起こる」という意味だと解釈します。

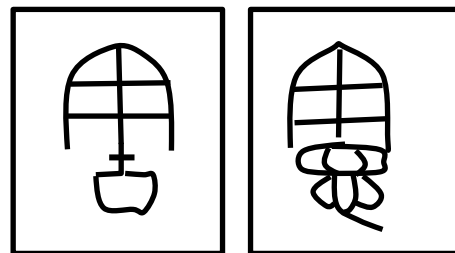
私が聞いた木久蔵師匠の落語では解釈はここままで、「うしろのしょうめんだ〜れ」（後ろの正面だ〜れ？）の解釈は直接語られませんでしたが、以上の解釈を総合すると、次のようなことにならないでしょうか？

「囲め囲め。せっかく籠の中に捕えた不気味なものが明け方に逃げ出して不吉なことを起こすかも知れない。いったい背後に何者がいるのか？」

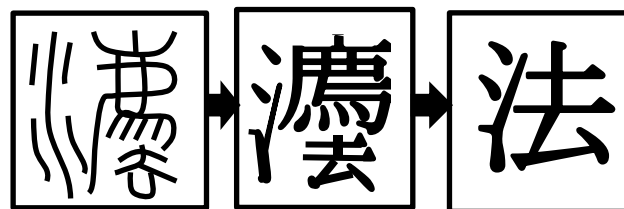
これをアメリカの現在の政治状況になぞらえて解釈してみると、次のように映らなくもありません。

「みんなで包囲して得体の知れないトランプ大統領を囲い込んでいるが、いつまたはみ出すか分かったもんじゃない。新しい時代が始まろうとしているこの時に、何か不吉なことを起こすかもしれない。いったい背景に何があるのか？」

考えてみると、民主主義の要諦は「囲む」ということと無縁ではないでしょう。憲法の「憲」の字が「害」の字に似ていることは本コラムでも取り上げたことがあるように記憶しますが、「害」の上半分(右の図を参照)は「かぶせもの」を意味し、下半分は「口」(くち)または「古」(あたま)を意味しています。だから、「害」は全体として「かぶせて阻害すること」です。同じように、「憲」の字は、「目で見たり、心で考えたりすることに制約を加える」という意味に由来します。人民が為政者たちを囲い込み、為政者たちが勝手な夢を見たり、勝手なことを考えたりすることに制約を加えること、つまり、これが「**主権在民の国の憲法**」の原理でしょう。それをわらべうた風に「かごめかごめ」(＝囲め囲め)と表現することは可能だろうと思います。



ついでに言えば、「憲法」の「法」の字は本来は右のような字で、左側はいわゆる「さんずい」、右側は上側が鹿や馬に似た字形で、下側は「去」、つまり、池の中の島に（鹿や馬に似た）珍獣を押し込めて外に出られないようにした様を表しています。



。「枠の中では自由だが、その枠の外には出られない」という意味です。したがって、憲法というのは、もともと字源的には「為政者がはみ出してはいけない法的枠組み」を意味しています。アメリカ合衆国憲法も、大統領といえども従わざるを得ない枠組み（囲い、籠）としてありますし、いま多くのアメリカ市民が、「大統領に勝手なことはさせない」と囲い込む努力をしているのでしょうが、トランプ氏がいつか飛び出して何か不吉なことをしでかすのではないかという不安に駆られているように思います。

トランプ大統領は、2017年1月20日のアメリカ第45代大統領への就任演説の中で、次のように述べました。

We are transferring power from Washington, D.C. and giving it back to you, the American People. What truly matters is not which party controls our government. But whether our government is controlled by the people.

※訳：われわれは権力をワシントン D.C. から皆さんたちアメリカ人民に移そうとしています。本当に大事なことは、どの政党が政府をコントロールするかということではなく、政府が人民によってコントロールされるということです。

意味しているところは「人民による政府」ということのようにですが、トランプ政権の権力執行のやり方が実際に「人民による政府」の名に相応しいものになっているのかどうかは問われているのでしょうか。

「人民による政府」についての有名な演説と言えば、1863年11月19日に第16代アメリカ大統領エイブラハム・リンカーンがペンシルヴァニア州ゲティスバーグの国立戦没者墓地で行なった演説でしょう。私も中学時代、歴史的な意義などよく分からぬままに、“Four scores and seven years ago, our fathers brought forth on this continent…”という「ゲティスバーグ演説」を暗唱したりしました。わずか2分程の演説ですが、その中に「人民による政府」についてのあの有名な下りがあります。

It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us (中略) that **government of the people, by the people, for the people**, shall not perish from the earth.

※意味：われわれ（生き残っている者）が身を捧げるべき残された大きな課題は、(中略) 人民の人民による人民のための政治を地上から決してなくさないことである。

中学校の頃は、「人民のための」は何となく分かるにしても、「人民の」と「人民による」とはどう違うのか、よく理解できませんでした。何のことはない、その答えが日本国憲法前文の下の引用部分に書いてあることを認識したのは、ずっと後のことです。

Government is a sacred trust **of the people**, the authority for which is derived from the people, the powers of which are exercised **by the representatives of the people**, and the benefits of which are enjoyed **by the people**.

※日本文：そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。

「人民の」は「権力が人民の信託に由来すること」、「人民による」は「その権力の行使は特定の権力者によってではなくまさに人民（またはその代表者）によってなされるべきこと」、そして、「人民のための」は「権力の行使による福利は他の誰のためでもないまさしく人民のためであるということ」を意味しています。実は、日本国憲法のこの部分は、GHQ（連合軍総司令部）による憲法草案の前文と同じですが、それが気に入らない人もいるかもしれません。5年前に発表された自由民主党の憲法改正草案には、このような規定はありません。

「人民による政府」という点では、現行日本国憲法はリンカーン演説の DNA をかなりよく受け継いでいるように思われますが、日本の場合にも、政治の実態において「人民の人民による人民のための政治」になっているのかが今問われています。トランプ演説も「人民による政府」を言葉上は標榜していますが、権力行使のなさりようを見ていると、ちょっと心配です。「平等」よりは「差別化」に傾斜し、ホワイトハウスという籠の中で「行け行けどんどん」とばかり自分の価値観にそって次々と大統領令に署名する姿も大いに心配です。アメリカの少なくとも半分ぐらいの市民は、なんとかトランプ大統領を囲い込んで、傍若無人な振る舞いを適切にコントロールしたいと念じているのかもしれませんが、「かごめかごめ」のわらべうたのように、「いついつ出やる」という心配の種は尽きないようです。

日本でタレント活動に取り組んでいるパクンことパトリック・ハーランさんは、あるテレビ番組の中で、トランプ大統領の就任演説で一番違和感をもったのは、次の一文だったと言いました。

This American carnage stops right here and stops right now.

(このアメリカの大虐殺は、今まさにここで終わる)

パクンが違和感をもったのは、まさにこの“carnage”という単語です。パクンはハーバード大学で比較宗教学を専攻した知識人で、相模女子大学や東京工業大学で教壇にも立っています。彼の耳には、「大虐殺」「大量殺戮」を意味する“carnage”という単語にトランプ氏一流の「針小棒大流の誇張主義」の一端を感じ、危うさを嗅ぎとったようです。現状を「負の極限状況」として描き、自分をそこからの「救世主」として位置づけるやり方は、「独裁者」と言われる人びとが好む方法の一つです。

私は、パクンの話を聞いてとてもびっくりしました。約 1,500 語のトランプ大統領の演説の中のたった 1 語で、パクンとつながったからです。実は、その時私は、「かごめかごめ」のわらべうたから「トランプ政権」のことを考察している内に、“cage”（籠）という単語から“carnage”（大虐殺）という語を連想し、“carnage”という単語は“cage”（籠～ホワイトハウス）の中に“RNA”を閉じ込めた構造になっているなあと、ぼんやり考えていたのです（carnage=ca+RNA+ge）。“carnage”は、私が日本の原水爆禁止運動に深く関わっていた頃、「核戦争の惨状」を描き出す表現として国際会議宣言の起草過程で時々使用を検討した言葉です。

いうまでもなく、“RNA”（リボ核酸）は、最も重要な遺伝物質である“DNA”（デオキシリボ核酸）に良く似たコピー物質で、遺伝やタンパク質合成で重要な役割を果たします。アメリカ政治は「本来の民主主義」（DNA）とは「似て非なる政権」（RNA）に実権を握られましたが、果たしてトランプ政権は「人民が囲む籠」（人民がコントロールする政府）の枠内で本当に民主主義を全うできるのかどうか、「鶴と亀がすべって」本当の意味の“carnage”を生み出すようなことはないのか、しばらく目が離せない—そんな気がしています。